東京都住宅協会による3K型分譲集合住宅のリフォームの実態

持続可能な住環境形成のための住戸プランに関する研究 その1

CASE STUDIES OF RENOVATION OF OLD 3K-TYPE CONDOMINIUM PLAN BUILT
BY TOKYO HOUSING ASSOCIATION

A study of planning for sustainable living environment 1

前田 修吾^{*1}, 岩岡 竜夫^{*2}, 岩田 利枝^{*2}

Shugo MAEDA, Tatsuo IWAOKA and Toshie IWATA

The purpose of this study is to identify the change of 3K-type (3 bedrooms and a kitchen) plans of condominium. Fifty-six condominium units originally built 51 years ago which were renovated over time were investigated. The present plans of the units were drawn and they were classified based on the relationship and function between each of the rooms. Some specific tendencies in the change in their function are found from the comparison between the original plan and the renovated plan.

Keywords : nLDK, Renovation, Sustainable, Condominium, Reconstruction

nLDK, リフォーム, 持続型住居, 分譲集合住宅, 建替え

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

集合住宅の計画において、世代や住み手の変化しつつも数十年にわたり生活することのできる住戸プランの提供は、建物のスケルトンの長寿命化とともに、持続可能な住環境の形成という視点から重要な課題の一つである。

過去、集合住宅の標準プランは、食寝分離を前提とした台所食堂を配したDK型プランが主流で、1956年当時、日本住宅公団（現：UR都市再生機構、以下公団と呼ぶ）の賃貸アパートや分譲マンションの標準プランでは、55-4N-2DKや56-4N-2DKと呼ばれる47㎡弱の2DKプラン（2つの個室と1つのDKを持つプラン）が最も多く使われていた^{注1)}。1956年度に建設された公団の世帯向け住戸の内、2DK型プランと3K型プラン（3つの個室と1つの台所を持つプラン）を比較してみると、2DKが3836戸で3Kの440戸を大きく上回っている¹⁾。しかし3K型プランは、2DK型プランと比較し、食堂を特定せず、家族構成やライフスタイルに対応して、入居者が自分で部屋用途を決定・変更できる柔軟性を備えている点で優れていると思われる。

本研究では、長期に渡って住まわれてきた3K型プランの現状を比較調査することにより、生活の変化への対応力とプランの変化に対する可変性というテーマでその柔軟性を検証することを目的とし、特に本稿では、リフォームの実態分析を中心に、まず3K型プ

ランの可変性についての特徴を明らかにすることを目的とする。

1.2 既往研究

ここでは、集合住宅のリフォームによる住み方の変化に関する既往研究を取り上げる。

S I住宅を中心とする高田らの一連の研究²⁾は、リフォームのしやすさを前提とした住戸の設計方法と、そこにおけるリフォームの実態研究を通じ、リフォームのきっかけや内容、リフォームの為の準備などを長期的な面と短期的な面とに分けて問題分析している。ライフステージの変化とインテリア・設備の変化との関連を分析している沢田は、特に二段階供給方式の「フリープラン賃貸住宅」でのインフィル変更に注目した研究³⁾で、子供の成長に伴う「子供室」の確立と撤去が重要なポイントであることを結論づけている。住み方の変化に着目している今井らは、一連の「ライフステージによる住み方変化の研究」⁴⁾において、公私室の分断・孤立化を問題点として取り上げ、私室の分離・分解の過程、部屋割りの変化等を、リフォームに言及せずに住み方の変化として調査している。

更に、大月らによる同潤会に関する研究がある。特に江戸川アパートメントに関する研究⁵⁾は住戸平面の変化を、増築と改修とに分けて分析しており、解体直前の全住戸の実測調査など、本研究と類似する部分が多い。

その他、リフォームに関して調査した既往研究は多く存在^{6) 7)}するが、研究方法の多くは複数の異なる間取りの住戸を対象とし

*1 東海大学大学院総合理工学研究科 博士課程

*2 東海大学工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science & Technology, Tokai Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture & Building Engineering, Tokai Univ., Dr. Eng.

た内容分析が多く、全戸共通の3K型プランの部屋用途の変化とリフォームの実態とを、実測したプランにより比較調査し、プランの可変性に関して明らかにした事例は存在しない。

1.3 研究方法

1956年に竣工・販売した東京都住宅協会（現、東京都住宅供給公社。以後公社と呼ぶ）の全56戸の分譲集合住宅（以下マンションと呼ぶ）は、2005年から住民の意思で建替えが検討されはじめた。筆者等はその建替えに伴う設計計画に当初から関与し、個別住戸の設計のために全住民と接触を持ち、住戸の実測調査や対面による生活形態のヒアリングなどを行った。本論文では、51年の年月を経た住戸の内部での数多くのリフォーム（本論では、単に内装や什器類の交換ではなく部屋の繋がり方と間取りの変更を指す）の実態を確認し、その上で、現在の全住戸の平面図を作成して、特に部屋の繋がり方や部屋用途の変化を中心に比較検討する。

2. オリジナル住戸の概要

2.1 全体計画

このマンションは、公社が、都内文京区の当時お屋敷町であった区域の一角に新築・分譲したものである。当時の募集パンフレット（図1）には、価格は一律1,600,000円で月収が38,250円以上、かつ住宅金融公庫から融資を受けることなど、いくつかの条件が載せられている。当時の一般サラリーマンの月収が20,000円程度^{注2)}であった事から見ると、高級なマンションであったと想像できる。

住戸の平面計画はいわゆる階段室型で、1号棟に3本、2号棟に4本の階段室があり（図2）、各階段室に4層8戸の住戸が配置され、合計で56戸となっている。この56戸は左右の反転はあるが、階や住戸の位置による違いが無く、全く同じプランで設計されている。

以下がマンションの規模等である。

- ・構造・規模 鉄筋コンクリート壁式構造 4階建て 2棟
- ・敷地面積 約3,468㎡
- ・建築面積 1号棟297.48㎡ 2号棟396.64㎡
- ・建蔽率 約20%
- ・建物高さ 11.6m
- ・隣接間隔 約21m

2.2 住戸内部概要

全ての平面計画（図3）は、階段を挟んで左右対称で専有面積（バルコニー収納は含まない）は一律44.95㎡、3つの和室と台所、洋式便器の水洗便所、ガス釜焚きの浴室からなる3K型の間取りである。居室3室は全て和室で6畳二間と4.5畳一間となっている。各室には必ず押入が付いており和室4.5畳の約0.5畳分は板の間のタンス置き場となっている。

北側6畳と南側6畳との間の押入は互いに入れ子状態になっており、押入の下部は10cm程度かさ上げされて個別に小さい引き戸が付いている。この小さな引き戸を開けると南北に空気が流通するように工夫されている。

南側6畳と4.5畳の和室（写真1）の間はフスマで仕切られているが、1間半の間を幅広の建具2枚で区切っているため区画はしやすい。また、浴室以外、台所と便所を含めた全ての部屋は廊下から個別に入る事が出来、全体的に各室の独立性は高いプランである。

台所（写真2）は、1.8m×2.57mの約3畳でそこにU字型

図1 当時の募集パンフレットの一部分

図2 住棟配置図

図3 オリジナル住戸プランの復元図

に作業台が配列されている。公団がステンレス製の流し台を当時サンウェーブと協同で量産化を開始したのが 1956 年頃からであり、公団がステンレスシンクを採用し始めたのもそれ以降である。従ってオリジナルの流しも人研石できていた。正面の窓に向かってその人研石の流しがあり、左右にそれぞれ、ガス台を置く奥行き 400mm の人研石の台と和室に向かっての対面型ハッチカウンターとなる木製の配膳台とがある。配膳台とガス台置き場との間のスペースは約 900mm である。各調理台の下部は収納になっており上部には吊り戸棚がある。また床材（無垢の羽目板）を 6 枚持ち上げると、逆梁を利用した深さ約 400mm の広い床下収納があり、全体としては豊富な収納量が確保されている。和室との間の対面型ハッチカウンター（写真 2）にはガラス障子をはめ込まれており、吊り戸棚は台所側と和室側の両方から取り出せる様になっている。

1956 年当時、洗面脱衣室の概念は一般的ではなかった。公団の標準プランに洗面所的な浴室の前室ができ、そこに洗面化粧台が設けられるのが 1959 年からであり、1960 年の一部の標準プランに初めて「洗面所」という言葉が出現している^{注3)}。今回の住戸にも洗面所、脱衣室は無い。オリジナルの洗面台は巾 400mm の小さな洗面流し（写真 3）でそれが浴室の壁に付いているだけである。

オリジナルの浴室（写真 3）は、モルタル仕上げの床まで約 400mm の段差があり、奥にガス外焚き式の木製の浴槽が設置され、煙突が外部に伸びていた。便所は水栓式で便器は当時では珍しいフラッシュバルブ式の洋風便器である。この便所には照明器具が無く、共用階段の明かりが窓から漏れてきてそれを明かりとしていた。

3. リフォーム状況の分類と分析

3.1 全住戸のリフォーム内容の整理

本章では、56 戸の住戸全ての実測調査の結果に基づく図面を整理・分析することにより、住戸のリフォームの内容を比較し、特徴を明らかにする。分析に際しては、図 4 にあるようにプランの左右を反転させて住戸の向きを統一し、間取りを、主な部屋の繋がりだけのパターンにしたものと、単純なゾーニングに表現しなおしたものの 2 種類を利用した。また、ゾーニングに際しては、部屋の大きさは重視せず部屋と部屋の繋がり方に注目し、収納^{注4)}は単純な太い黒線のみで表現した。

部屋名称は、個室 (R)、台所 (K)、廊下 (H)、浴室 (B)、便所 (T)、洗面所 (S) とし、4 つの収納を台所対面ハッチ (C1)、廊下収納 (C2)、南北和室 6 畳の間の押入 (C3)、4.5 畳押入 (C4) とした。

なお、ここで言う個室 (R) とは、キッチンセット、浴槽、便器を持たず、かつ玄関ドアに直接面しない居室を示し、キッチンセットを持ち部屋 (K)、玄関ドアに面する部屋 (H)、キッチンセットを持ち玄関ドアに面する部屋 (HK) などと区別している。

3.2 廊下を中心にしたプラン分析

表 1 は、廊下と個室、台所との繋がり方を分類し、個室の数との関係で表にしたものである。縦軸が、廊下とどの部屋が統合したかを台所、個室に分けて a～d に分類し、横軸に個室の数を 3 個室から 0 個室のワンルームまで 4 つに分類した。

〈a〉はオリジナルの廊下がそのまま残るか一部が残ったグループで、〈a-3〉の 11 戸が最もオリジナルに近い間取りの住戸である。〈b〉は廊下が台所と統合され台所の機能に吸収されたグループで、〈b-3〉

写真 1 南側続き和室 6 畳側からの写真と同テラス窓写真
(左側写真の収納が北側和室との間の入れ子状態の収納)

写真 2 北側和室から見た台所側写真と台所内部写真
(写真撮影のため建具は外してある)

写真 3 オリジナルの壁付け洗面器、木製浴槽、便器写真
(浴槽の上部煙突は外してある)

図 4 間取りの簡略化

表1 廊下と部屋との統合方法による分類

	3個室	2個室	1個室	0個室	計
(a) 廊下が独立	11	7	1	1	23
(b) 廊下と台所が統合	17	3	0		20
(c) 廊下と個室が統合	0	0	0		0
(d) 廊下・台所・個室が統合	1	6	2	0	13
計	28	19	8	1	56

R (個室) : キッチンセット、便器、浴槽を持たず玄関ドアに直接面さない部屋
 K (台所) : キッチンセットを持ち玄関ドアに直接面さない部屋
 H (廊下) : 玄関ドアに面しキッチンセットを持たない部屋
 HK (台所・廊下) : キッチンセットを持ち玄関ドアに直接面する部屋

もほぼオリジナルに近い住戸である。〈c〉の台所を独立させたまま個室と廊下だけが統合した住戸は1戸も無かった。〈d〉は台所と個室が統合され、更に廊下もその部屋に吸収されたグループである。

廊下が他の部屋に吸収された住戸は〈b〉及び〈d〉の33戸で、廊下を独立させ残している〈a〉の23戸を上回っている。この〈a〉の23戸は全て、便所の入口が廊下に面し、廊下から直接入ることのできる個室を残すようにしており、オリジナルの持つ個室の独立性が保存されている。反対に、廊下が無くなった〈b〉〈d〉の33戸は居室が玄関ドアに面し、その居室から各個室や便所に入ることができるようになっており、先の〈a〉23戸と対照的である。

また個室数の減少理由として、台所が北側の和室を取り込んで広い台所にしてしまう傾向が多く見られ、この現象は廊下の有無とは関係なく全体的に確認できた。しかし〈a-2〉〈a-1〉の合計11戸は、廊下から単独で入ることのできる個室を残していた。

この表の分析から、廊下を他の用途の部屋に吸収させ、部屋の面積の拡張を図ろうとしている実態が確認できた。その中で特に、台所とだけ統合した事例が〈b〉20戸（35.7%）と多く、台所を拡張しようとする傾向が顕著に現れていた。また、〈a-3〉11戸を除く45戸で廊下の全体又は一部を部屋に統合させており、部屋の独立性よりも公共性を優先する傾向が現れていた。

3.3 個室の変化と収納の変化

オリジナルのプランの4つの収納C1、C2、C3、C4が、リフォームを通じてどのように変化したかを、個室数の減少との関係で分析した。

表2は、個室数の変化に対して収納の残った数^{注5)}を一覧表にしたものである。縦軸が収納の名称、横軸が個室数である。個室数の変化に対して、個室にあるC3、C4にはあまり変化がないが、台所と廊下にあるC1、C2の変化が顕著だった。特に2個室、1個室と部屋数が減少するにしたがってC1、C2の減少が著しい（表2網掛け部）。これは、台所や廊下周辺の収納の多くが消滅したり別の形に変化したりしていることを意味する。それに反して、個室に付属する収納は、内部での細かい変更は見られるが、その位置や大きさにおいてはほとんど変化していない。個室の収納に比較し台所周辺では、プランの変化に合わせて収納の大きさや質の変化が著しい。

3.4 台所と他の部屋との関係によるプラン分析

表3は、台所（K）と廊下（H）、個室（R）との関係を、台所と他の部屋との繋がり方を中心に分析し、更にキッチンセットの形状に重ねて分類した結果である。縦軸に、台所と廊下、個室などの統合先による分類を、横軸に、U型、I型、L型というキッチンセットの形状を置いた。

この表では〈e-1-U〉の11戸がほぼオリジナルに相当し、それ以外の45戸は何らかの台所と周辺の部屋との間で統合が行われている事が見て取れる。しかし、その統合方法は単一ではなく、〈g-1〉や〈h-1〉のように東西に統合した住戸や、〈g-3〉や〈h-3〉のように南北に統合した住戸、〈g-4〉のように斜めに統合した住戸など様々である。

台所と廊下、個室との繋がり方を見ると、台所が個室と統合した〈g〉〈h〉が22戸なのに対し、個室から独立している〈e〉〈f〉が34戸で独立型の方が多い。この内、台所と廊下のみが統合した〈f〉の20戸が統合方法としては一番多く、廊下を台所の一部に取り込

表2 オリジナル収納の残存数

	3個室	2個室	1個室	0個室	計	
C1	23 (82%)	2 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	25	44%
C2	17 (61%)	2 (11%)	2 (25%)	0 (0%)	21	37%
C3	28 (100%)	14 (74%)	2 (25%)	0 (0%)	44	78%
C4	25 (89%)	11 (58%)	6 (75%)	1 (100%)	43	77%

表3 台所と他の部屋との統合とキッチンセットの形状による分類

形状	U型	I型	L型	計
統合				
〈e〉 e-1 台所が独立				11
〈f〉 f-1 台所と廊下が統合				20
f-2
〈g〉 g-1 台所と個室が統合				12
g-2
g-3
g-4
g-5
〈h〉 h-1 台所・廊下・個室が統合				13
h-2
h-3
h-4
計	27	16	13	56

（図面は事例の中の一つである。各欄右下の数字は住戸数を示す）

み、最も簡単な方法で台所面積の拡大を図っていた。一方、個室と統合した〈g〉〈h〉の部屋は全ての住戸で和室が洋室に変化し、食堂としての環境を作っていた。

キッチンセットの形状では、U型は合計で27戸あるが、中にはオリジナルに近い〈e-1〉11戸を含んでいる。キッチンセットが当時のままの住戸が1戸あるが、他の住戸はシンクをステンレス流しに交換したりガス台置き場を新たなカウンターに交換したりしていた。また表中の太線で囲った部分が示すように、〈e〉〈f〉ではU型キッチンが25/31戸（80%）と多いが、〈g〉ではI型キッチンが9/12戸（75%）、〈h〉ではL型キッチンが8/13戸（62%）と使用するキッチンセットが変化していた。

台所と廊下の統合により台所家電製品の置き場を作るなど、面積の拡張を図るリフォーム〈f〉が20戸と非常に多いが、これは、個室を絡めて統合させた比較的大がかりなリフォームより手軽に台所の拡張ができた為と考えられる。また個室との統合後、オープンな広い台所になった住戸が23戸あるが、玄関ドアとの間に建具を介さないで拡張した台所〈f〉〈h〉と、玄関ホールを建具で区画した台所〈g〉との2種類に分かれている。すなわち台所は、個室と統合し開かれた共有スペースへと変化しているが、〈f〉〈h〉は廊下を含める事でより公共性の高い部屋に性質が変化し、〈g〉は家族内での共有スペースのみの部屋に変化した住戸であると言える。

3.5 洗面所の新設に関する分析

表4は、洗面所がどのように作られているかを調べるために、浴室（B）と洗面所（S）、便所（T）の関係を、浴室と洗面所との繋がり方で3つのパターンに分類したものである。縦軸に浴室と洗面所の繋がり方を同室か隣接か別室かによって分け、横軸に洗面所と便所の関係をやはり同室、隣接、別室に分けて分類した。

オリジナルプランは〈i-T別室〉に分類されるため〈i〉は34戸と多くなっている。〈j〉は元々細長かった浴室を区画し一部分を洗面所にしたリフォームであるが、オリジナルの便所の配置はほとんど動かしていない。〈k〉は、洗面化粧台を単純に廊下や部屋の隅に設置した例であるが、洗面所と言うような室ではなくコーナーという形である。〈T別室〉が49戸87%あり、それをあえてリフォームしなかった住戸が目立つ。一方〈ST同室〉にした4戸は、全てオリジナルの浴室入り口をつぶし便所入り口だけを残している。

全体として、当時のままの生活状態の住戸が60%を占めていたが、リフォームとしては、洗面・脱衣室的な部屋を新設するリフォームが多かった。また、オリジナルの便所の独立を保つ住戸も多く、〈j-ST同室〉のような洗面、便所同室型のリフォームは3例しかなかった。

3.6 リフォームの全体的傾向

廊下、収納、台所、洗面所を個別に分析してきたが、最後に、これらのリフォームに相互関係があるかどうかを、全56戸の個別分類表（付表）を通して確認した。

図5は台所と洗面所廻りの相関を見るため、台所の統合方法と洗面・便所の統合方法の関係をグラフにしたものである。縦軸は住戸数の%で横軸に表3の台所の分類〈e〉〈f〉〈g〉〈h〉を取っている。このグラフによると、〈e〉〈f〉の個室との統合がない独立型キッチンの住戸より、〈g〉〈h〉の個室と統合し台所の共有化を図った住戸の方が、〈j〉〈k〉の独立した洗面所を作ろうとする傾向が強くなる

表4 洗面所と浴室、便所の関係

便所	T	S-T	<div>S T</div>	計
浴室洗面	便所独立	便所洗面所隣接	便所洗面所同室	
〈i〉 <div>B S</div> 浴室洗面所同室	<div><div>B S T</div> </div> 32	<div><div>B S-T</div> </div> 1	<div><div>B S T</div> </div> 1	34
〈j〉 B-S 浴室洗面所隣接	<div><div>B-S T</div> </div> 12	<div><div>B-S-T</div> </div> 2	<div><div>B-S T</div> </div> 3	17
〈k〉 B S 浴室洗面所別室	<div><div>B S T</div> </div> 5	0	0	5
合計	49	3	4	56

（図面は事例の中の一つである。各欄右下の数字は住戸数を示す）

図5 台所の変化と洗面所廻りの変化

ている。リフォームを通じ台所は開放、統合化してより公共性が高まっているが、その他の水回りは独立、細分化させ個室化させる傾向が強い事が読み取れる。

4. まとめ

築51年の3K型プラン56戸のリフォームプランを分析して比較検討した結果から、以下の知見を得た。

1, 廊下を中心にした分析から、廊下が部屋に吸収される傾向が多いことが確認できた。廊下が、台所に吸収されたり、台所と個室とに統合して広い一部屋になったりと、独立性が高かった各部屋が、廊下と統合することにより、公共性の高い部屋に変化している現象を多く見る事ができた。

2, 収納の分析から、台所や廊下周辺のオリジナル収納の多くが消滅してるが、個室に付属する収納は、その位置や大きさにおいてはほとんど変化していないことが分かった。台所や廊下周辺の収納は、他の部屋との統合につれて変化していったと思われる。

3, 台所を中心にした分析からは、台所が廊下を取り込み、台所家電品や食器棚などの置き場のために面積拡張を行っている実態の多いことが確認できた。廊下と台所だけの統合は20戸（35%）と多く、冷蔵庫置き場などを比較的手軽に確保できたと思われる。

また、統合後の台所のあり方が、玄関ホールとの間に建具を介さない台所と、建具で区画した台所との2種類に分かれている。個室と統合し開かれた共有スペースへと台所は変化したが、廊下を含める事でより公共性の高い部屋にした住戸と、廊下を区画し家族内での共有スペースとしての部屋にした住戸との違いが現れている。

4, 洗面所に関しては、全体として、当時のままの生活状態の住戸が60%を占めていたが、リフォームとしては、洗面・脱衣室的な部屋を新設するリフォームが多かった。また、便所の独立性も87%で確保され、洗面所と便所が一部屋になるプランは3戸しか見られなかった。

5, リフォームの全体傾向から、台所の統合・開放化を行った住戸の多くが、独立した洗面所を作っている実態が明らかになった。リフォームを行った住戸の多くは、台所は統合・開放化することで公共性を高め、その他の水回りは独立・細分化させ個室化させる傾向が強かった。

以上本稿では、廊下や個室とのつながり方に関連した台所の開放性と公共性の程度が、住む人の都合によって微妙に異なっており、それが多くの異なったプランを生み出している実態を明らかにすることができた。そして今回の3K型プランは、その違いに柔軟に対応してリフォームされている事実を確認した。

参考文献

1) 日本住宅公団 20 年史：日本住宅公団（現、U R 都市機構）1975 年発行より

2) 高田光雄，加茂みどり：乳幼児期の子育てに起因するリフォームニーズ－S I 型集合住宅におけるリフォームに関する研究－，日本建築学会計画系論文集第 599 号，pp.25－32，2006.1

3) 沢田知子：住戸平面の特徴および居住者属性の変化からみた住まい方の経年変化－二段階供給方式による集合住宅の居住過程に関する研（１）－日本建築学会計画系論文集第 493 号，pp.99－107，1997.3

4) 笠島泰，今井正次，松本壮一郎：集合住宅の住戸平面と就寝分離・分解の時期－ライフステージによる住み方変化の研究 1－，日本建築学会計画系論文報告集第 422 号，pp.45－52，1991.4

5) 大月敏雄他：同潤会江戸川アパートメントにおける住戸ユニットの増築と改修に関する研究，日本建築学会計画系論文集第 613 号，pp.15－22，2007.3

6) 藤本秀一他：公社賃貸住宅団地における自主リフォームの実態と一般化に向けた課題－公的賃貸団地のストック活用方策としての自主リフォームに関する研究その 1－，日本建築学会計画系論文集第 605 号，pp.7－13，2006.7

7) 福本哲二：多摩ニュータウン初期開発団地における住宅リフォームの実

態調査，日本建築学会技術報告集第 20 号，pp.227－232，2004.12

8) 日本住宅公団 20 年史の標準プラン集による：日本住宅公団（現、U R 都市再生機構）1975 年発行

注

- 注 1) 日本住宅公団 20 年史によると、1955 年、56 年に建設された 2DK 型のプランの中で最も多く使われたプランがこの 2 種類となっている。それぞれに北側階段室の N 型と南側階段室の S 型とがある。
- 注 2) 人事院勤務条件局給与第一課「民間給与の実態」1958 年発表の資料によると、30 歳一般事務系会社員の平均月収は 21,357 円であった。
- 注 3) 日本住宅公団 20 年史内の公団標準設計平面図集によると、浴室は 55 年のプランからあるが、洗面脱衣室的な前室が初めて見られるのは 59-4N2DK 型に扉のない洗面室があるのが最初である。更に、60 年の南日吉 -5N3LDK にはそこに「洗面所」という室名が初めて出現している。
- 注 4) 収納は、押入や物入れのように、造作として床から天井までの高さで固定されている物のみを対象とした。従って、床下収納や天袋、台所のカウンター下収納等は除外している。また、固定式の食器棚や収納類は、家具と判断し対象外とした。実際には、台所周辺ではこれらの固定式食器棚が多く使われていた。
- 注 5) 収納の増減は、収納の内部の状況は無視して数えている。また同じ場所で巾や内容が変化しても同一として数えている。

付表 全住戸の個別分類表

室名 住戸番号	廊下	台所	洗面	収納	室名 住戸番号	廊下	台所	洗面	収納
1-101	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-105	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C3 C4
1-102	〈a〉 2	〈g〉 L	〈i〉 T	C3 C4	2-106	〈a〉 2	〈g〉 L	〈i〉 T	C3 C4
1-103	〈a〉 2	〈g〉 L	〈j〉 T	C3 C4	2-107	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4
1-104	〈a〉 2	〈g〉 U	〈i〉 T	C4	2-108	〈a〉 2	〈g〉 L	〈i〉 T	C3 C4
1-105	〈d〉 2	〈h〉 L	〈j〉 T	C3	2-201	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4
1-106	〈d〉 2	〈h〉 L	〈j〉 S-T		2-202	〈a〉 2	〈g〉 L	〈i〉 T	C2 C4
1-201	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-203	〈a〉 1	〈g〉 L	〈j〉 ST	
1-202	〈a〉 1	〈g〉 L	〈j〉 S-T	C2 C4	2-204	〈b〉 3	〈f〉 L	〈i〉 T	C3
1-203	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4	2-205	〈d〉 2	〈h〉 L	〈k〉 T	C3 C4
1-204	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4	2-206	〈d〉 1	〈h〉 L	〈i〉 T	C2 C3 C4
1-205	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-207	〈d〉 1	〈h〉 L	〈k〉 T	
1-206	〈d〉 2	〈h〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4	2-208	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4
1-301	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4	2-301	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4
1-302	〈a〉 1	〈g〉 L	〈i〉 T	C4	2-302	〈d〉 3	〈h〉 L	〈j〉 T	
1-303	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-303	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4
1-304	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-304	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4
1-305	〈b〉 2	〈f〉 U	〈k〉 T	C1 C3	2-305	〈b〉 3	〈f〉 U	〈j〉 T	C1 C2 C3 C4
1-306	〈b〉 2	〈f〉 L	〈i〉 S-T	C3	2-306	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4
1-401	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-307	〈d〉 2	〈h〉 L	〈k〉 T	
1-402	〈d〉 2	〈h〉 L	〈i〉 T	C3 C4	2-308	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4
1-403	〈b〉 2	〈f〉 U	〈j〉 T	C3 C4	2-401	〈d〉 1	〈h〉 L	〈j〉 T	C4
1-404	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4	2-402	〈a〉 2	〈g〉 L	〈j〉 ST	C3
1-405	〈b〉 3	〈f〉 L	〈i〉 T	C3 C4	2-403	〈b〉 3	〈f〉 L	〈i〉 T	C3 C4
1-406	〈d〉 1	〈h〉 L	〈k〉 T	C4	2-404	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3
2-101	〈d〉 2	〈h〉 L	〈j〉 T	C3	2-405	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3
2-102	〈a〉 0	〈g〉 L	〈j〉 T	C4	2-406	〈b〉 3	〈f〉 L	〈i〉 ST	C3 C4
2-103	〈d〉 1	〈h〉 L	〈j〉 ST	C3 C4	2-407	〈b〉 3	〈f〉 U	〈i〉 T	C1 C3 C4
2-104	〈a〉 2	〈g〉 L	〈j〉 T	C3 C4	2-408	〈a〉 3	〈e〉 U	〈i〉 T	C1 C2 C3 C4

(2009年3月10日原稿受理，2009年9月25日採用決定)